

# SRID NEWSLETTER

No. 389 May 国際開発研究者協会 創設者 大来佐武郎

〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

URL: <http://www.sridonline.net/>

SRID 学生部 2007 年度スタディーツアー

～インドにおける経済発展と拡大する格差～

筑波大学 第三学群 国際総合学類 4年

中野美緒

## お知らせ

1. 懇談会 日時：6月3日（火）午後6時30分から9時頃まで  
場所：国際協力銀行 開発金融研究所内 大会議室  
講師：神田 SRID 会員  
テーマ：JICA の環境協力—地球環境問題を中心に
2. 6月号のニューズレター 大門氏（本会） 平間氏（婦人クラブ）

SRID 学生部 2007 年度スタディーツアー

～インドにおける経済発展と拡大する格差～

筑波大学 第三学群 国際総合学類 4年

中野美緒

SRID 学生部の年間活動の集大成としてのスタディーツアーを、2007 年度年も実施してまいりました。学生部のツアーは、企画、資金調達、訪問先へのアポイントメント、現地でのマネジメントに至るまで、約半年かけて学生が着手していきます。

スタディーツアーを通して、何度も綿密な議論を重ねていく中で、「議論するだけでなく、アクションを起こしたい」というモチベーションに繋がったことが、今回のスタディーツアーで学生たちが得た最大の成果かもしれません。

## ■インド訪問の経緯■

今回訪問したのは、「新興国」として注目されるインドです。ツアーの開催地として決めた理由は、急速に発展するインド経済と同時に、社会に拡大していく格差という問題意識を抱いたためです。将来の経済大国としての潜在性を持つインドではありますが、いまだに国際機関や先進国政府からの援助を受けていることも現状です。インド政府が設けた貧困ライン以下の人々は3億人から4億人存在し、富裕層と貧困層の経済的格差は大きく広がっています。

なぜ、インド国内での再配分が機能していないのか、現在貧困層へどのような取り組みがなされているのか、私たちは事例を見ていく中で多くの議論を交わしました。

## ■インドの貧困層を見る視点■

私たちは貧困層に対する取り組みを次の2つの視点から調べてきました。

### I. アクターからの視点：政府、企業、NGO（非政府組織）

①各アクターの役割、②アクター間の協力関係

### II. 国際協力からの視点：ドナー国、国際機関の活動

①経済発展を促進する支援、②貧困削減に努める支援

※本ニュースレターでは、すべてを紹介していません。

2007年度スタディーツアーでの新しい視点は、企業の活動です。C. K. Prahalad が書いた、"The Fortune At The Bottom Of The Pyramid: Eradicating Poverty Through Profits"という本に興味を抱き、その中で紹介されているある民間病院を訪問してきました。企業の利潤追求活動の中で、貧困削減が可能となるのか、今回のメンバーたちが抱く共通の問題意識といえます。

## ■私たちが見たインド社会の一側面

インドの発展を語る上で、エリートが存在は欠かせません。インドのエリートは、IAS、IIM、IIT と呼ばれることがあります。

IAS は官僚、IIM はビジネスマン、IIT はエンジニアのエリートです。

私たちは、IIT（インド工科大学）出身の IBM 職員の方にお会いしました。インタビュー中は、彼のバックグラウンド、キャリアパスをお聞きし、輝かしい経歴に、メンバーは驚嘆としていました。

私たちのメンバーの一人が、IBM 職員の方へのインタビュー後に、「Money attract money」と感想を述べていたことが印象的でした。財閥出身の IBM 職員の方を見て、階級格差と所得格差の連動を感じました。

実際に、私たちは低カーストの人々に会う機会を得られました。正確にはカースト以下の人々で、「ダリット(untouchable)」と呼ばれています。ダリットの所得、就学率などは著しく低く、私たちが訪問した農村の女性は識字率が 30%ほどでした。ダリットの人々は一つの農村の中でも離れた場所に居住区を設け、他の農民との接触を避ける姿が見られました。そこで活動する NGO は、農村全体での定期ミーティングを開催して、ダリットが孤立しないよう努力していました。

カースト制度が廃止されている現在では、身分を捨てることができます。しかし、出生地にいる限りカーストは人々の認識として存在します。

社会に根強く残るカースト。インド政府や NGO が低カーストの人々をサポートすればするほど、affirmative action、positive discrimination となっているような気がして、ジレンマを感じました。

## ■国際協力の観点からみたインド

先進諸国の企業にとって、アウトソーシングの受け皿としてのインド、マーケットとしてのインドへの期待は高まっています。

先進諸国の政府にとっては、インドとの外交の手段として ODA を活用しています。在デリー・ドイツ大使館を訪問した際に、広報官の方が、インドと EU 間の政治、経済的協力の重要性を強く主張されていました。

日本にとっても、インドとの経済関係は重要であり、日系企業も多く進出しています。日印関係は、日本政府にとっても重要度が高いです。JBIC の援助供与国 5 年連続 1 位であるインドでは、大規模な援助プロジェクトが展開されていました。

私たちは JBIC の円借款事業であるデリーメトロ建設事業を訪問してきました。首都デリーの交通渋滞、大気汚染を緩和するために建設中の地下鉄は、現状として交通渋滞を促進している段階でしたが、空港や観光地までのアクセスが格段に改善することが見込まれます。しかし、路線が限定的で、乗車するために駅まで足を運ぶ地下鉄は、「市民の足」としてはまだ定着していないようです。

また、デリーメトロのファシリティと比較して、各地方都市を結ぶ列車の駅は、整備不十分で、チケット一枚買うのに多大な労力と時間を要することを私たちは経験しました。デリーメトロの設備、サービスを、インド全体の交通機関に共有する必要性を感じました。

インドの潜在力を考慮すると、支援するだけの成果が得られる国としてドナーからの信頼が厚いように思えました。経済成長を促進するような支援が先進諸国からすればプライオリティーが高いように感じました。

### ■インド国内アクターの貧困層への取り組み

国内の大きな格差を縮小するため、貧困層のボトムアップのために政府、企業、市民団体が活動しています。

官僚のエリート集団である IAS は、インド各地に配備され州行政を担っています。IAS が政策を作成しますが、IAS とその下の行政府職員との能力の格差が大きく、政策実施の面で支障をきたすことが問題でした。

また、植民地からの独立以降、民主主義を持続させているインドですが、民主主義であるが故のジレンマ、意思決定の遅さという問題も抱えています。私たちはミクロなレベルで貧困層へどのような取り組みが行われているのか見てきました。

インドでひとつのブームとなっているマイクロファイナンスをスタツアのスケジュールに取り入れました。

インドのある現地 NGO が行っているマイクロファイナンスは、住民の SHG (Self-Help Group) を対象に乳牛の購入資金を貸与し、牛乳の売り上げから返済していく仕組みを作っています。返済率は 92% と非常に高く、ある女性の方にインタビューすると、所得は上昇したのでプロジェクトの成果はあげられているようでした。

一方で、私たちが危惧したのはリスクマネジメントです。農民の方々は NGO からのマイクロファイナンスと並行して、乳牛の維持費を賄うために銀行からのマイクロファイナンスも受けていました。つまり、ダブルローンで牛乳の収益のみで返済しているのです。乳牛が死亡した場合、搾乳ができなくなった場合のリスク対応は準備しているかという質問に対して、行っていないという回答をいただきました。

これに関して、貸与する NGO 側はそこまで配慮する必要があるのではないかということを提言しました。支援としてのマイクロファイナンスは、ビジネスとしてそれを行うよりも、一方踏み込んだ活動が望まれます。

貧困層への取り組みの興味深いアクターとして、企業があげられます。例えば、ネスレの事例では、原料の牛乳を調達する際に、農民のスキルトレーニング、農村のインフラ整備から開始しました。結果的に、農民の所得は向上し、ネスレは安価で高品質の原料が調達可能となったことが、CSRの成功例として頻繁に語られます。企業内の問題と社会問題の共通項をCSRとして扱う、これから発展していくであろう「戦略的CSR」の一形態だと思えます。利潤追求と貧困削減が両立すれば、ひとつのwin-win関係の構築だといえます。

私たちは、「企業」ではないのですが民間病院を訪れました。自らの収益のみで病院を経営を行っている点で、利潤追求を行う企業と共通点があります。私たちが訪問した病院の活動コンセプトは、「世界最高技術の医療サービスを貧困層に無償で提供する」ことです。実際に、その病院は日本の総合病院規模の建物とファシリティを持ち、世界でも評価される技術を誇っています。所得ごとに値段設定を変えることで、貧困層の医療アクセスを改善しました。アイデアでもって経営を軌道に乗せたその病院の創設者は、社会起業家でもあると私たちは考えました。

#### ■スタディーツアーを終えて■

世界でもトップクラスの富裕層と、ボトムクラスの貧困層が並存するインド社会は、政府、企業、NGOにとっても活動のフィールドが広がります。さらに、諸外国政府、国際機関、外資系企業にとってもインドへ進出するモチベーションは高いです。新しいアクターの活動形態、新しいアクターの連帯が生まれるインドという国に、毎日が発見の連続でした。

インド社会を語る上で、頻繁に用いられる diversity という言葉。多様な構成員、多様な構造の中で、同時に存在する national unity。入り混じるようで、どこか統一感のあるインドの不思議に魅せられ、メンバー一同インドを立ち去る際に、「We'll be back」を新しい友人たちに繰り返し、帰路に就きました。

